

---

# 夢音色

白月清夢

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夢音色

### 【Nコード】

N5751Z

### 【作者名】

白月清夢

### 【あらすじ】

資産家の父である双三が亡くなり、遺産の整理をする為に故郷である《白羽根村【しらばねむら】》へと帰る酉【みのる】。

双三の息子として、そして村の長として遺産の整理をしていくと、徐々にこの村が昔どういう村だったのかが分かり始める。

そんな中、夜に出会った少女。

皆はその少女を《小夜の巫女》と呼ぶ。

彼女は一体誰なのだろうか、そしてこの村に伝わる伝説とは――。切なくも儂い恋物語。

## 第一話 帰省（前書き）

推敲前の作品ですので、削除して推敲後改めて掲載する可能性がございます。

ご了承ください。

## 第一話 帰省

何年ぶりだろうか、この風景を見たのは。

揺れるバスの中、僕は汚れた窓から外を眺める。

澄む空から眩しすぎる程に照らす太陽。そして照らされる作物たち。収穫はまだされていないようで、熟した李<sup>すもも</sup>が収穫される日を待たんとばかりに赤色に染まっていた。

近くの都市からバスで来るのでさえ数時間もかかる故郷は、六年前から何も変わっていなかった。近くの村に行くのでさえバスなしでは行けず、肝心要のバスは一日に六本しかない始末。多くの者が都会に移住したり、隣の村へと移った。

人が住むにはあまりに不便な村だった。

そして、僕が恨んだ父が住んでいた村でもあった。

「白羽根村【しらばねむら】、白羽根村です」

バスの運転手が故郷の名を呼んだ。

静かにバスは停まると、ドアを開いた。僕は箱の中に小銭を投げ入れると外へと出た。

外から見ると遥かに太陽の光は眩しく、そして熱気が僕を覆う。バスの中で休んでいた体は活動を始め、汗腺が一気に開いているのが分かった。

バスの標識には《白羽根村》と書かれているはずだが、長年の汚れや《日 木寸》となっていた。

ここから実家までは歩いて三〇分はかかるだろうか。飲み物でも買っておけばよかったかと後悔する。

「仕方ない」

そう呟き、自分を奮い立たせると、僕は大きなボストンバッグを抱えて歩き始めた。

事の発端は父親の弁護士からの一報だった。

『お父上が亡くなりました』

聞いた時、僕は何も感じなかった。

父と喧嘩して家を出るように都会の高校、そして大学へと進出した身だ。今さら何も言うことはない。本当であれば今頃はサークルの合宿に行っているはずであった。しかし、資産家だった父の遺産は相当ならしく、一旦帰省せざるをえなくなった。

決して口数が多いわけではなかった父からは、家のことは何も聞いていなく、弁護士が言うには全てを把握しそして整理がつくにはかなりの時間がかかるということだった。

そして僕は大学を後期から休学にし、故郷へと帰ってきた。疲れた体に鞭を打つようにしてバッグを背負い直す。

都会の暮らしで歩き慣れているつもりではいたものの、塗装されていない道路に入る限りまで詰め込んだバッグを背負って歩くのは中々難儀なものだった。

時折通る車に乗せてもらおうかと思いつつも、僕の行く方向とは逆の車ばかりだった。

それにしても、父が残したものは何があるのだろうか？

考えてみると、ほとんど何も分からなかった。分かるものと言えば、子供の時住んでいた実家と大規模な農場くらいだ。農場を持っていると言えども、実際は土地を貸しているだけで、実質的な関係はないのだから面識のあるものは家だけだった。

父のことなど知りたいと思わなかったし、知りたくもなかった。我尽で頑固で人に言うことを聞かない。全てが嫌いだった。

「ふう……」

肩が悲鳴をあげた。予想はしていたが、やはりバッグに詰め込み過ぎた。しかしそれが程良い固さをだし、バッグを椅子代わりに座るのにはちょうど良かった。

まだ歩き出してから一〇分足らずのことだった。自分の精神の弱さに呆れる。喉が渇く中も、座り込んで休んでいた。

そうして炎天下の中黄昏るようにしていた僕の前に、一台の車が止まった。

「もしかして酉【みる】さんじゃないですか」

「……あきさん？」

「そうです。随分と大きくなりましたね」

車の中から声をかけてきたのは使用人をしていた、あきさんだった。あきさんは小さいころから僕をさん付けで呼んだ。

あきさんは帽子の上にタオルを巻いた農作業の格好をしていた。

「もしかして実家の方に行かれるのですか」

「うん。少し休んでいたところ」

「お送りしますよ。中はクーラーも効いていますから、早くお入りください」

僕は素直にあきさんの提案に聞き入れ、バッグをトランクに放り込むと車の中へと乗った。中はとてもクーラーが効いており、汗をかいた僕には寒すぎるほどだった。

「ありがとうございます」

「いいえ、お会いしてよかったです。お帰りなさるのなら連絡ください」

「どうして」

「そうすれば迎えに行きましたのに」

「でも、ここらは電波入らなくて携帯使えないから、連絡とるにもとれないよ」

「何を仰いますか。今は携帯も使えますよ」

「そうなの？」

「ええ」

あきさんは少し自慢げにポケットから携帯をとりだした。それは二つに折ったりスライドさせる携帯ではなく、都会に住んでいた僕でさえ持っていないスマートフォンだった。

「最近、隣の村に携帯のお店ができたのでそこで買いました」

「へえ。すごかったいいよ」

「ありがとうございます」

「後で番号とメルアド交換しようよ」

「はい」

あきさんは嬉しそうだった。

あきさんは僕が一二歳の時に我が家にやってきた。その時はまだあきさんは一七歳で、僕とあきさんは姉弟【してい】の関係に近かった。中学卒業と共に白羽根村を離れた僕はあまりあきさんと一緒にいた時間はないけれど、手紙のやりとりはしていた。

どうして我が家で使用人をしているのかは知らない。

「酉さんが帰られたということは、もう知っているのですね」

「うん、双三【そうざん】が亡くなったって」

「はい。惜しい方が亡くなりました」

恨む僕とは裏腹に、あきさんは父を尊敬していた。

「手紙ではなく、電話しようかとも思いましたが双三様の弁護士の方が連絡をすると仰っていたので、私からはしませんでした」

「うん」

「申し訳ありません」

「いいって」

きっと、それがあきさんなりの配慮だったのだろう。手紙だって、電話だと迷惑かもしれないと思ってあきさんが送ってきたのがきかけだった。

「父はどうして死んだの」

「脳梗塞です」

「そう……」

弁護士からは死亡したとは聞いていたが、死因は聞いていなかった。

「お昼寝されているときに亡くなられたようでした」

「……」

「私がもう少し早めに気づいていれば双三様は亡くならずに済んだかもしれないのに……申し訳ありません」

「そんなことはないよ。これが父の運命だったんだ」

別に慰めるつもりでいったわけではなく、それが本心だった。

「父は何か言っていた？」

「いえ、なにしろお昼寝されていた時に亡くなられたので」

「ああ、そうだよね」

「着きましたよ、酉さん」

子供のころよく遊んだ庭、よく実がなつては食べていた無花果【いちじく】の木、そして木造の大きな家。

全てが懐かしかった。

トランクからバッグを取り出すと、その懐かしき世界の中へと足を踏み入れた。



## 第一話 帰省（後書き）

お読み頂きありがとうございます。

ツイッターの方で情報等を提供していただきますので、よろしければご覧ください

Twitter..aura|inparadox

## 第二話 静（前書き）

推敲前の作品ですので、削除して推敲後改めて掲載する可能性がございます。

ご了承ください。

## 第二話 静

中に入ると出迎えたのは父の弁護士であり、僕に双三が亡くなった知らせを送った小林さんだった。小林さんは黒のスーツに身を纏い、黒ぶちの眼鏡をかけた姿しか見たことがなく、今日もそうだった。

「お久しぶりです、酉様」

「お久しぶりです」

「この度は突然のことで、さぞかしお力落としのこととお察し申し上げます」

「父は、きっと自分が生きたいように生きたと思います。お電話の方、ありがとうございました」

「いえ、あなたのお父上がお亡くなりになる前に、もし自分が亡くなった場合はすぐに酉様に連絡をするようにと言っておりましたので」

「父が？」

「ええ」

「そうですか……」

どういう意図があるのかは、僕には分からなかった。

「静【しず】様が奥の和室にありますので、どうぞお顔を見せてあげてください」

「分かりました」

「では私は双三様の遺産の資料を確認してまいりますので」

「ありがとうございます」

小林さんは一礼をするどこかへと消えて行った。

「あきさん」

「はい、なんでしょう」

「父は、僕に何を伝えたかったのだろう」

「……それは、酉さんにしか分からないことです」

「……そうだね」

「酉さん、お先に静様の元へと行ってくださいませ」

「あきさんは」

「私は着替えて参ります。何せ買い物に行く途中でしたから」

「農作業していたわけではないの？」

「私は静様の身の回りの世話とこの家を任されている身ですから、そう長い間家の方をを空けるわけにはいきませんよ」

それなのにこの恰好をしているのですか。と言いかけつつもその言葉を心の中にしまった。

「じゃあ買い物はしないで帰ってきてしまったのか。ごめん、あきさん」

「いえいえ、酉さんの世話もまた私の役目ですから」

あきさんは笑うと白い歯を覗かせた。

「では失礼します。荷物の方はお部屋に運んでおきますのでそのまま静様の元へとお行きください」

「ありがとう」

あきさんは大きなポストンバックを持つと二階へと向かって行った。

「しずさん、か」

——少し、会いづらいな。

しかし、顔を出さないわけにはいかない。

少し気は乗らないが、僕は靴を脱ぐと奥の和室の方へと向かった。

「お久しぶりです」

「元氣そうね、酉さん」

「ええ」

「ごめんなさいね、本当ならちゃんと出迎えるべきなのに」

「いえ、無理をなさらないでください」

布団の中から僕を見るしずさんは、中学の時に見た時より痩せており、少し頬がこけていた。

「父の葬式に間に合わず申し訳ありません」

「いいのよ。こんな辺鄙【へんぴ】な場所ですから、来るのにだって時間はかかるわ」

「父の葬式はいつ行われたのですか」

「確か、4日前よ」

「そうですか」

「あなたも最後に双三さんの顔を見たかったでしょうに、ごめんなさい」

「いえ、大丈夫です。しずさんはお身体の方は大丈夫ですか」

「ええ。ここ最近あまりよくはないけれど、一時と比べると良い方だわ」

「それはよかったです」

「ありがとう、酉さん」

しずさんは優しく僕にほほ笑んだ。

「酉さんはこちらにはいつまでいるの」

「学校には暫く休むと伝えてますので、ある程度整理がつくまではいようと思います」

「ごめんなさいね。本当なら大学生活を楽しんでいる頃でしょうに」

「いえ」

しずさんは少し悲しそうな目を浮かべた。

金山【かなやま】双三の妻であるしずさんは僕の本当の母親ではない。僕の母親、金山由莉香【ゆりか】は僕を産むとともに亡くなった。その時はまだ一九歳だったそうだ。

その後、双三はしずさんと結婚した。そのころから静さんは容態が良くはなかったらしく、僕が六歳になる頃には布団に寝ていることが多かった。しずさんは今で言う政略結婚で双三と結婚をしたようだった。

もっとも、しずさんは双三を愛していたし、双三も静さんを愛してはいたようだった。

「失礼します」

入ってきたのはあきさんだった。先ほどもまでの農家のような格好ではなく、着物を着ておりその手には周りに水滴がつくほどコップが冷えた麦茶と、和菓子のをせた盆を携えていた。

「こちらをどうぞ」

「ありがとう」

気づけば喉は乾ききったままだった。麦茶をもらうと共に飲み干した。

「あらあら、喉が渴ききっていたのね。あきさん、もう一杯持ってきてあげてください」

「はい」

「ごめん、あきさん」

「いい飲みっぷりでした」

あきさんは二人を笑わせた。和菓子を置いて行くとあきさんはまた奥へと消えて行った。

「ところで酉さん」

「はい」

「あなたは何故呼ばれたのか分かりますか」

「父の遺産の整理でしょう？」

「それもありますが、あなたはこの村の長にならないといけないのです」

「長、ですか」

白羽根村には代々長がおり、その長だけが白羽根村の陽の部分から陰の部分までを知っているとされている。先代は父の双三が長だった。

「ええ。でももう長なんて言っているような時代ではないことも私もよく分かっているわ。だから別にこの村に帰って来なさいなんて言わない。ただ、長として知るべきものは知っておいて欲しいの」

「そうですか」

それは父が残したもののの中で、一番正体が分からないものかもしれないと思った。

「それは一体どういうものなのでしょう」

「自分で確認なさい。もし知っていたとしても私からは言えないわ」  
「何か文献でもあるのですか」

「いいえ」

「ではどうすれば」

「いずれ、分かるわ」

「いずれ……」

しずさんは何を知っているのだろうか？

濁されたことでどのような事実があるのか、知るのが不安になった。

「酉様」

呼んだのは小林さんだった。手には黒いバッグを携えていた。

「双三様の遺産に関する書類の方の確認が終わりましたのでご説明  
させて頂きたいと思います」

「ありがとうございます」

「資産家でありました双三様の遺産はあまりに膨大な量なため、追  
々説明をさせて頂きたいと思います。今日はそれとは別のことを」

「他に何が？」

「遺言ですよ」

「遺言ですか」

あの父が遺言を……。信じられないながらも内容を小林さんに聞  
いた。

「どのようなことを書いているのでしょうか」

「実は、私も存じ上げておりません。酉様が帰るまで決して開ける  
など言われて預かっておりましたので」

「そうですか」

一体どんなことが？

それは遺産の配分に関してだろうか、それとも家を出て行った僕  
に対する苦言だろうか。

あらゆる可能性が考えられた。

「それでは、お受け取りください」

黒いバッグから出されたのは白い封筒だった。前面には遺言と書かれており、膨らんだ封筒は遺言の長さを感じさせた。

「それではお開けください」

少し深呼吸して、心を落ち着けながら僕は封筒の封を切り、中身を出した。



## 第二話 静（後書き）

お読み頂きありがとうございます。

ツイッターの方で情報等を提供していただきますので、よろしければご覧ください

Twitter..aura|inparadox

### 第三話 遺言（前書き）

推敲前の作品ですので、削除して推敲後改めて掲載する可能性がございます。

ご了承ください。

### 第三話 遺言

中に入っていた紙にはおそらく父の字であろう角ばった字で今後  
のことを書いていた。

遺産の分配の方法。

農地の管理の仕方。

弁護士や使用人の給与。

長としてすべきこと。

長い文章の中に僕に対する言葉はなく、どれもこれもが《我が子  
》に対して、というよりは《後継ぎへ》というような内容だった。

「父の遺言はこれだけですか」

「いえ、実は……」

そういうと小林さんはもう一通の封筒を取り出した。表には同じ  
く角張った字で《西へ》と書いてあった。

「先ほどの遺言として残されたものです。こちらは父から子への  
手紙として残されたものです」

「そうですか」

遺言とは別に言葉を。一体何が書いてあるのだろうか。

「しかし、お渡しするわけにはいきません」

「それは……どうしてですか」

「これもまた、あなた様のお父上である双三様のお言葉です」

——父は何をしたいたのであろうか。

僕に家を継いでほしいのか、それとも自分の好きな道を生きてほ  
しいのか。何を意図しているのかは到底僕に分かるものではなかつ  
た。

「お渡しする時期が参り次第、この封筒をお渡しいたします」

「それはいつなのでしょう」

「全ての整理が終わり、全てを知った時と言われておりました」

「全て、ですか」

「おそらく一段落し、落ち着いて読んでいただきたかったのではないのでしょうか」

その言葉から、今は知らなくても問題はない中身であるということとは分かった。

「双三さんらしいわね」

そう言葉を放ったのは静さんだった。

「あなたは知らないかもしれないけれど、双三さんは酉さんをすごい愛していたし、出て行ったあとも心配なさっていたのよ」

「……そうですか」

「だからきつと、あなたに話したいことがいっぱいあったのよ。親子の会話はゆっくりしたいものでしょう。きつと、そういうことよ」  
そう、亡くなった父にとって、唯一僕と《会話》する方法はこの残された手紙だけなのだ。

「静さんには手紙はないのですか」

「いえ」

「私はいらないもの」

「どうしてです」

「私はいつも手紙を頂いていたもの」

静さんは嬉しそうだった。きつと、それだけ父と過ごした日々が幸せだったのだろう。静さんは、僕の知らない双三を知っていたのかもしれない。

「ところで、どうしますか」

話を変えたのは小林さんだった。

「何がですか」

「資産家でありました双三様の残した遺産は大変莫大なものです。それをどうするか以前に、確認するだけでもとても一日やそこらでは終わるようなものではございません。ですので、急ぐようであれば今日からでも確認なされた方がいいと思います」

「主にどのようなものがあるのですか」

「白羽根村にあるものは、大半は農地と森や山などです」

「この村以外にも何かあるのですか」

「白羽根村の長でありました双三様は、赤獅子村の管理者でもありました」

赤獅子村——白羽根村よりもさらに奥にある村。今はもうほとんどの者がその村を出て行き、住んでいる者はほとんどいない。

「広さだけで言いますと白羽根村の半分ほどしかございませんが、赤獅子村もまた双三様の残した遺産でございます」

「赤獅子村には今は人は」

「管理をしております者が数人ほどいるばかりです」

「それと、《小夜の巫女》もいるわよ」

そう付け足したのは静さんだった。

「小夜の巫女？」

「赤獅子村と白羽根村の間に森があるでしょう？ あ森の中に洞窟があると思うのだけれど、夜にその近くに行くと白い服を着た少女がいるらしいわ。だから《小夜の巫女》と呼ばれているの」

「巫女ですか」

「洞窟の伝説に因んでつけられたのでしょね」

小さい頃、聞いたことがある。森の中にある洞窟の中には入ってはいけないと。あの洞窟は神様の住処で、入ると怒って天災をもたらすと。そういう輩を中に入れないために巫女があ洞窟を守っていると。

「もしかしたら、会うことになるかもしれないわね」

「その、小夜の巫女というのは一体誰なのでしょうか」

「……いづれ分かるわ」

その言葉に何か違和感を感じたが、それ以上は何も触れなかった。「さて、どうしますか」

「そうですね。急ぐことはないですが、他にすることも無いようですし行ってきます」

「気をつけてね」

「はい」

「それではご案内致します」

すつくと立ち上がると、廊下へと出た。廊下ではあきさんが盆にコップを携えて座っていた。

「すいません……、お水の方をお持ちしよう」と

「ごめん、あきさん。少し出かけてくる。ありがとう」

「お気をつけて」

おそらく気を遣い、ずっと待っていてくれたのだろう。あきさんに礼を述べると僕は玄関で靴を履き、外へと向かった。

太陽は輝きを減らすことはなく、燦燦と光と降らすと共に地上に熱気を与えていた。

「それでは参りましょうか」

「まずはどこに行くのでしょうか」

「最初は酉様もご存じであります、谷岡家が営んでいる生花農場です」

「あそこはここから車で十分程でしたよね」

「そうです。谷岡家の生花農場がここから一番近いと思われます」

「今は誰が作業しているのでしょうか」

「娘様の千鳥様です」

「鵜【つぐみ】さんではなく？」

「鵜様も大学卒業してからはこちらに帰られてはいますが、農場は忙しい時期に手伝う程度で今はプログラマーの仕事をなされております」

「千鳥と鵜さんは元気なのですか」

「きっとお会いできますよ。向こうも酉様とお会いしたいと思いますよ」

「……そうだいいですね」

「車を回してきますのでお待ちください」

「ありがとうございます」

小林さんは額に浮かぶ汗を拭いながら車の方へと消えて行った。

——千鳥。

僕は千鳥と交わした約束を破った。その重みが今でも僕と千鳥の間に障壁を作る。

怒っているだろうか。

それとも、もう忘れてしまっているのだろうか。

どちらにせよ、僕が覚えている限りこの見えない壁は取り除くことはできないのかもしれない。

暫くするとエンジン音をきかせながら青色の車が走ってきた。

「お待たせしました。さあ、お乗りください」

乗り込むと同時に、僕は覚悟する。

嫌なことから、逃げたくとも逃げられないこともあり、そして向かい合わないといけないということ。

車の中は熱気を打ち消そうとクーラーが力の限り冷えた風を送っていた。

### 第三話 遺言（後書き）

お読み頂きありがとうございます。

ツイッターの方で情報等を提供していただきますので、よろしければご覧ください

Twitter..aura|inparadox



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5751z/>

---

夢音色

2012年1月9日01時47分発行